

## 結 言

大庭 弘継

本論集を企画した時点では、いまだ世界は統合への流れの中にあり、様々な超国家権力はその先にあるものと考えていた。だが、いま現在の世界は、統合から分離へと流れが変わる潮目にあるのかもしれない。2017年2月の現時点で世界を切り取ると、時代が反グローバル化に向かいはじめたと感じるかもしれない。米国の大統領にドナルド・トランプ氏が就任し、英国はEUの離脱を国民投票で決し、いくつかのアフリカ諸国が国際刑事裁判所協定からの離脱を決定するなど、歴史の潮目が変わったのだと考える人もいるだろう。

だがこの揺り戻しは、まさに予想していた反発である。理想が雲散霧消したわけではなく、かといって理想が抱える脆弱性も消えたわけでもない。理想と反発との間で、歴史は行ったり来たりを繰り返してきた。その上で、未来へと続くデコボコ道が少しでも滑らかになるよう、本論集『超国家権力の探究』が貢献できていれば、これに勝る喜びはない。

緒言でもふれたが、本論集は、2015年1月に南山大学社会倫理研究所が主催した研究会「超国家権力の出現に備えて：内包する脆弱性の探求」での報告内容をもとに執筆されたものである。執筆者には、2015年1月時点での情勢を踏まえた内容で執筆いただいております、当時の問題意識と現状とで乖離を生じさせてしまった。刊行の遅延、それに付随した諸問題すべては編者である大庭弘継の責任である。深くお詫びする次第である。

なお本論集は、JSPS 科研費(課題番号15KK0103)並びに南山大学社会倫理研究所「『国際社会』と倫理」研究プロジェクトの成果である。

また本論集の刊行には多くの方々からご支援をいただいた。特に社会倫理研究所の同僚であった鈴木真氏(関西福祉科学大学准教授)には、倫理学の観点から様々なコメントをいただいた。深く感謝したい。また本企画の発起人であったがスーダンに赴任したため編者を固辞した明治大学大学院の角田和広氏には、全論文の校正を行ってくれたことを明記し、感謝したい。最後に本論集の刊行を辛抱強くお待ちいただき、編集作業も支援いただいた南山大学社会倫理研究所教授の奥田太郎氏をはじめ、社会倫理研究所のみなさんにも深く感謝する次第である。

